

確かな学力の育成と評価の在り方

—「書くこと」の活動を通して、読みの深化をはかる授業づくり—

田中 宏幸 山元 隆春 實谷 富美 八澤 聡

1. はじめに

「確かな学力」について、文部科学省中央教育審議会答申（H.15.10）は、「知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力までを含めたもの」としている。このことを踏まえ、国語科における「確かな学力」の在り方のひとつとして、教科書教材を学ぶ意義・必然性を生徒自身の中から引き出し、それを高めることを通して「探究」的な学びへと導いていくことが必要と考える。

本研究では、この生徒自身の意欲・関心を引き出すプロセスの在り方を探ると同時に、さまざまな他者の言葉と協同させることで言葉を吟味し選択する「探究」活動を仕組み、体験的に学ばせる指導の在り方を明らかにしていく。また、生徒から表出する言葉の多様性を理解し、そこに適切な評価を行うことで、新たな学習意欲の向上につながる評価の在り方を探っていく。

2. 研究の構想

(1) 研究主題について

昨年度の取り組みから、「確かな学力の育成」のために見えてきたことは、次の通り¹⁾である。

- 生徒の興味・関心を生かした課題・題材の設定
- 多様な教材の提示
- 生徒の気づきを生かした授業づくり
- 新しい発見や発想や発想の転換を促す調べ学習
- 情報の比較や表現の交流・吟味を行う場面の設定

この研究は、主に「書くこと」領域を中心として実践的に進めてきた。そこから得られたことは、実際に「書く」作業を行うことによって、生徒は自らの思考を明らかにし、他者に向かって発信する意欲を高めていくということである。

そこで、本研究では、「読むこと」の学習場面において、効果的な「書く活動」を仕組むことで生徒一人ひとりの思考活動を確かなものとすることをめざす。

さらに、そこで得られた思考を他者に向かって発信し練り合い、評価し合うことによって読みの深化をはかろうとするものである。

(2) 研究の方法

本年度は、今まで積み重ねてきた研究を参考にしながら、中学校国語科の学習における探究する姿をイメージしながら授業・単元を計画する。具体的には、次の5点である。

- ①さまざまな他者の言葉と出会い、問いを立てる
- ②個の考えを深め吟味する
- ③他者とともによりよい方法で問題解決に取り組む
- ④学びの成果を適切に表現する
- ⑤学びを振り返り新たな学びにつなげる

また、実践に当たっては、中学校1年生と3年生の古典教材を取りあげることとする。これまでの本校生徒の古典学習に対する実態を見ると、学力テストでは内容読解・言語知識について概ね理解している。しかし、授業後の振り返り・アンケート等をみると中学校学習指導要領「伝統的な言語文化」に示された「楽しむ・親しむ」意識を育んでいるとは言い難い実態が見られるためである。

古典教材について、生徒自らが問いを立て、一人ひとりが考えを持ち、それらを交流し合い、読みを深めることができる学びの在り方を中学校・学部共同で検証する。

(3) 検証の方法

検証の方法として、生徒の学習アンケートや作品、授業記録などを取りあげ、考察を行う。

3. 実践1—7年「姫の物語? 翁の物語?—竹取物語」(学校図書中学校国語1)

(1) 授業の構想

①単元について

本題材は、中学校最初の古典学習として設定された単元の中心教材である。古典「竹取物語」の原文を、冒頭と別れの場面を中心に切りあげ、現代語の意味を適所に配置することで、文語文と初めて出会う学習者が、文語を正確に読み取れるよう工夫がなされた文章である。また、口語教材文は、あら筋と主要話題・登場人物の営みを簡潔に述べながら、「語り手」の思いや考えに迫る問いを適切に配置することで、古典＝昔話といった捉えからの脱却を図り、読書の対象としての古典の価値に気づかせるように構成された文章である。

この二つを組み合わせることによって、歴史的仮名遣いや単語の意味といった口語と異なる文語の基礎・基本的な言語事項を学ぶと同時に、古典に興味を持ち、実感的に古典を読む心構え・態度を育成することに適した教材となっている。

指導にあたっては、まず古典の世界観を感じさせるために、現代に生きる古語や風習を紹介し合い実生活に即した学びとなるようにした。また、古典を初めて学ぶ学習者に対して、いきなり文語文の音読から入ることは困難であると考えた。そこで、初読の場面では、授業者が範読を行うことで、口語との違いに気づかせ、その後、基本的な歴史的仮名遣いの例を示すことで、歴史的仮名遣いの規則性を考える主体的な学び・理解となるようにした。さらに、文語文と口語訳部分を照らし合わせながら読ませることで、現代での意味を確認させ、文語文の正確な理解につながるようにさせた。

この活動を行うとき、小集団学習を取り入れ、個々の文語に対する気づきを交流させることで他者の視点に学ぶ態度を育成すると同時に、生徒自らが文語の意味を考える主体的な学びとしての学習を体験させることで、実感的に文語を理解させた。次に口語で書かれた問いに対してワークシートを活用し、教材の具体的な記述を取りあげて言葉への意識付けを図った。それらを基に、学習者一人ひとりの思い・考えを文章として具体的に表現させることで、論理的思考力・読解力の育成を図った。さらに、その思いや考えを小集団・学級全体の中で、自分の言葉によって交流し他者の言葉と練り合わせることで、多様な考え方や表現の仕方を体験しながら、より適切な結論を導いたり、表現したりする力を育てていった。

②目標

- 古典の読書材としての価値に気づき、古典に親しもうとする態度を育てる。
- 古典の持つ言葉の調子を体験し、声に出して表現する力を育てる。
- 現代仮名遣いと歴史的仮名遣いの違いを理解し、文

語文を音読する力を育てる。

○述べられている語り手の思いを、現代の生活とかわらせて読み取る力を育てる。

○自分の思いや考えを文章として適切に表現する力を育てる。

③学習計画（全7時間）

- 第1次 古典を探そう……………1時間
- 第2次 古典に触れる・文語と口語の違い……1時間
- 第3次 物語作り（文語の意味）・音読……………1時間
- 第4次 語り手と対話しよう……………2時間
- 第5次 竹取の翁はどんな人？……………2時間

（2）授業の実際と考察

〈第1次 古典を探そう〉

まず初めに、関心・意欲を誘うために現代生活の中に生きる古典を感じるものについてブレインストーミングを行った。生徒からは、お正月・節分・七夕等の季節の諸行事、弥生・師走といった月の古称、十二支等が出された。それらを取り上げ、現代の季節感とのずれや三十日（みそか）や午前・三日月といった現代に生きることばの意味に気づかせていった。生徒たちは、普段日常的に接したり使ったりしている行事や言葉の由来・意味を知ること、現代と古典の世界とのつながりを実感すると同時に、古典学習への関心・意欲を示す内容を、8割以上の生徒（69/81人）が授業後の振り返りに記述していた。

〈第2次 古典に触れる・文語と口語の違い〉

歴史的仮名遣いに気づかせていくために、教科書にある原文とその読み仮名の違いを確認させ、そこにどんな法則があるかを考えさせた。教科書にある歴史的仮名遣いは「は（ワ）・ひ（イ）・ふ（ウ）・へ（エ）・ほ（オ）・む（ン）・しう（シュウ）・づ（ズ）・を（オ）」であり、個人作業によって抜き出し、整理を行い、自分が考えた法則をワークシートに書きとめさせた。この段階で机間指導を行ったところ、ほとんどの生徒が「はひふへほ」の読みの変化には「ワイウエオ」との関連を記述しており、そのうち37名の生徒が本文中にある「昼・光・広げ・ほど」の単語の無変化との関連について記述していた。次に、ワークシートとして歴史的仮名遣いを一覧にしたものを配布し、他の法則についても考えさせるグループ活動を行って、全体交流を行った後、解説を行っていった。単元終了後の確認小テストの結果を見ると、通過率が90%を越えており、生徒たちが主体となって取り組んだことで、法則の理解がより体験的・実感的になったと考える。

〈第3次 物語作り（文語の意味）・音読〉

次に、原文の内容を理解することを目的として、原

文とその横に記された現代語訳を参照させながら、現代語の物語を書きあげる学習を行った。このとき原文と現代語訳の単語・文節の区切りを意識させることで、言葉への意識を高めさせるよう留意した。多くの生徒は、予想していた通り、現代語訳に原文を当てはめ、原文の句読点通りに書き下した読みにくい直訳文を書いていた。そこで、「読みやすい物語に」として、「文の区切り・意味のつながり」という二つの視点を与え、4人グループでの作品・意見交流を行うことで、古典を読むうえでの表現や意識をする姿勢を育むようにした。この学習で文意・文節を理解した上で、ペアワークによる本文の音読につなげることで、古典のリズムに気づかせ体感させるようにしていった。その結果、次の古典教材である「とらわれた心に突き立つ矢一宇治拾遺物語」の学習では、意識に取り組み、文節を考えながらリズムカルに読もうとする姿勢がいつも強く見られていた。

〈第4次 語り手と対話しよう〉

本次では、まず教科書本文に沿って月の世界と地上の世界の違いについて、整理・確認を行った。次に、この活動の結果を踏まえた上で、教科書本文にある問い「竹取物語の語り手の思いを探る」活動に取り組んでいった。この学習においても、個→小集団（4人）→全体の学習過程で行った。個の思考の文章化による明確化と小集団での交流を取り入れることで、話し合いが活発に行われていた。そのことから、教科書本文に記述されている具体的な内容は当然として、そこから推測できる他方の世界の様子についての考えにも広がりが見られ、生徒たちの振り返りからも他者との交流による効果について記述された内容が多く見られた。次に示した内容は、それぞれの学習について生徒がワークシートに記していた顕著なものである。

生徒の記述（抜粋）月と地上の世界の違いについて

月の世界	地上の世界
<ul style="list-style-type: none"> ・年をとらない ・物思いがなく、悩まない ・心がない（非情） ・不老不死 ・死の恐れがない ・成長が早い ・すべての人が美しい ・すべてが理想的な世界 ・空を飛べる・雲にのる ・超能力がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・年をとっていく ・物思いに苦しめられている ・相手のことを考える（死よりも別れがづらいから） ・病気や死ぬことを恐れながら生きている ・いろんな人がいる ・貧富の差がある ・きたない ・天人が罪をつぐなう所

語り手が地上の人々を語るのはなぜか？（交流後）

・月の世界に地上はとうてい及ばないけど、いろいろなことに悩んだり、考えたりすることに生きる

意味がある。

- ・欲もあるけど、よく考えたら欲がなければ金持ちでも意味はないと思う。
- ・不老不死でずっと変わらずにいるのはいいけど、限りある人生で今をがんばることもすばらしい。
- ・今の生活が苦しいので、理想的な世界を考えて見たんだと思うけど、やっぱりこの地上で生きるしかないことを訴えたかった。
- ・翁・姫を見捨てていくかぐや姫を書くことで、人は人といっしょに暮らしていることを言っている。

生徒の振り返り（抜粋）

- ・交流前は、月の世界をうらやましく思う気持ちが強かったけど、いろんなことを悩んだり考えたりしている今の自分がいいことに気づけた。
- ・自分の知っていた「かぐや姫」と違って、何も感じなくなって帰ったことや不老不死の薬のこと・千年も読み継がれてきた人が生きる話だったということに気づいた。
- ・自分は地上のつらさや悲しみといった悪い方ばかり考えがいつてしまったけど、交流の中で物思い＝人の感情について改めて考えることができてよかったです。

上述のように、憧れの世界の月世界という認識から、人の生きる意味について気付く内容が見られ、この学習によって思考の深まりが行われたことが伺えるものであった。

〈第5次 竹取の翁はどんな人？〉

最後に、教科書に示された第三の問い「竹取の翁の物語」として読む活動を行った。今回は本校図書室にある北杜夫訳「竹取物語」（講談社刊少年少女古典文学館）を読んだ。この学習は、今後の古典学習の発展につなげたいと考え、それぞれの感想を自由に交流させることで単元の結びとした。

（3）実践を振り返って

以上、述べてきたように、授業場面において生徒一人ひとりの書く活動を仕組み、少人数の交流による練り合いを経て、全体への発信を行うことは、読むことの学習においても効果のあることと考える。特に評価という点について様々な考え方はあるだろうが、小集団での交流活動自体が、他者による肯定的な評価となって作用しており、生徒一人ひとりの学習意欲を喚起させるものとなっていると考える。さらに、交流の中で生徒自身の中に生じた新しい思考発見の積み重ねは、確かな学力育成の有効な手段であると考えられる。

4. 実践2—9年今に向かって「言葉が見た風景—おくのほそ道」「発見する言葉—枕草子」(学校図書中学校国語3)

(1) 授業の構想

① 単元について

本単元は、「言葉との出会い」「歌の源流へ」「漢詩」「言葉が見た風景—おくの細道」「発見する言葉—枕草子」の五つの題材で構成されている。中でも「おくのほそ道」と「枕草子」は、「読み物」としてとらえたとき、現代に通じる作者のものの見方や考え方、また作者ならではの切り口から、古典への関心を高めることができる教材である。

指導にあたっては、これまでの古典学習の仕上げとなるよう、また今後の古典学習への契機となるよう古典学習の意義についても考えさせていった。そして「今に向かって」続く言葉の営みを感じ取らせたいと考えた。学習の際には作者の生涯や時代背景などを基礎知識としてもつことで、そこに生きた人間の心情をより深く味わわせた。現代と変わらないところ、違うところなどを比べさせることで、古典への興味・関心も生まれると考えた。また、生徒が好む音読を多用し、古文のリズムや言い回しに慣れさせ、内容については既存の現代語訳を利用し、古典に親しむきっかけを作りたいと考えた。さらに視覚教材の利用で豊かなイメージを構築させた。加えて、文体の違いを意識しながら「おくのほそ道」では芭蕉になりかわって『芭蕉日記』を書き、「枕草子」では教科書掲載の口語訳を書き換え、再度原文と比較することで、言葉の工夫の効果を確認させると同時に読みの深まりを感じ取らせた。最後に生徒自身のオリジナル作品を書かせ、自然や社会に対する意識を高め、言語感覚を豊かにさせていこうとした。

② 目標

- 古典の世界を読み味わう楽しさをとらえ、進んで作品に向かおうとする態度を育てる。
- 表現の特徴をとらえ、参考にしながら創作活動を行い、文体や語感などに対する認識を深め、言語感覚が豊かになるようにする。
- 文章を読んで、人間・社会・自然などについて考え、自分の意見がもてるようにする。

③ 学習計画 (全12時間)

- 第1次 おくのほそ道・松尾芭蕉の概略を知り、学習の見通しをたてる。…………… 1時間
- 第2次 各行程における芭蕉の気持ちを考える。(芭蕉日記を書くことを通して読みを深める。)…………… 5時間
- 第3次 枕草子・清少納言についての概略を知り、学

- 習の見通しをたてる。…………… 1時間
- 第4次 各段の大意を把握し、枕草子の文章の特徴をつかむ。…………… 3時間
- 第5次 「うつくしきもの」の口語訳の書き換えを行い、言葉の効果を考える。…………… 1時間
- 第6次 文体の工夫を意識して、オリジナル作品を書く。…………… 1時間

(2) 授業の実際

〈第2次 各行程における芭蕉の気持ちを考える。〉

現代語訳を参考に、旅に憧れた芭蕉の気持ちを考えさせた。そして、「前の旅から帰ってきたとき」「大掃除をしていたとき」「松島の月を思い浮かべたとき」「家を処分したとき」「旅立つ直前に以前住んでいた家を訪ねたとき」「いよいよ江戸を離れるとき」など、場面設定を自由に選ばせてとして『芭蕉日記』を書かせた。基本的な枠組みは外さないことを最低条件とし、文体も自由、内容にオリジナルを加えて良し、俳句はそのまま使ってもオリジナルな俳句を創作してもよいというゆるやかな条件のもとで行った。

生徒たちの取り組みぶりとしては、書くのには意外と時間がかかっていた。しかし、どの場面が一番自分にとって書きやすいか、そのときの芭蕉の心境はいかなるものか等々、悩みながらも一度作品を読み直すことで、一つ一つの言葉の意味を味わうことにつながったと言える。例えば、日頃書くことや読むことを得意としていないある生徒が書いたものは、最後の2文が敬体になっていた。理由を聞くと、「遺書のつもりで書いたので、そこは他人に読まれたときのことを考えて変えた。」と答えた。そこにははっきりとした意志があり、芭蕉の覚悟を深く反映させた日記を書くことができていたと評価できよう。文章を読んだだけでは、その思いにまで至らなかったと考える。以下は「前の旅から帰還したとき」の生徒の『芭蕉日記』である。

生徒作品1 『芭蕉日記』

わしは今日、旅を終えて久しぶりに我が家に帰ってきた。待つ者のいない我が家には、クモが巣を張っており、お世辞にもきれいとは言い難い。そこで掃除を始めたわしであるが、何というか、また旅に出たくなってしまった。流れる月日も行く年も、旅人のようである。わしの尊敬する人々も皆、旅の中で死んでいる。ああ、また旅に出たい。旅の途中で死んでしまっても構わない。そう思っていると、いつの間にか、わしは旅支度をしていた。股引を繕い、三里に灸をすえ、笠の緒も付け替えた。そして、わ

しはふと思った。(ああ旅で死ぬかもしれぬのだから、この家は他の人にあげてしまおう。家に帰らぬわしがこの家を所有していたとしても、家にとって良いことなど一つもない。) そうしてわしは、弟子の一人である杉風の別宅に住まいを移すことを決意した。さて、また旅の中で過ごす日々が始まるな。楽しそうじゃわい。

同様に「平泉」の場面でも日記を書かせた。以下は生徒の感想である。

生徒の感想1 (抜粋)

- けっこう難しかったけれど、芭蕉の気持ちを少しつかむことができたので良かったです。
- けっこう昔の人なのに、考え方が大人だから書きやすかった。というか、いろいろ想像しやすかった。
- 日記は難しかった。でも、芭蕉になりきってみると、いつもとは違う感じがして楽しかった。
- あらためて芭蕉に気持ちを考えると、とてもよく理解できる部分があった。したいことがあったら何も手につかず、そのことばかり考えてしまうとか、昔のことを思って泣くほど悲しくなったりとか。
- 芭蕉になりきってみて日記を書いてみると、芭蕉は本当に旅を愛していたんだなと感じました。
- 芭蕉さんが平泉の城跡で涙を流した理由や、その後の自分の思いなどを深く考えてみました。人生をかけて行った旅では、自分の死も近くに感じ、自分の人生とも照らし合わせていたんじゃないかなあと感じました。

〈第5次 書き換えを行い、言葉の効果を考える。〉

「うつくしきもの」の口語訳の書き換えを行った。想定読者対象を「年下」もしくは「一般」と設定し、それぞれにふさわしい文体は何かを考えて書き換え、場



にふさわしい表現を追求し、原文との比較を通して言葉の効果を考えることを目標とした。

結果として、多くの生徒は「一般」を対象とし、「淡々と説明し、余分なことが入らないのでわかりやすい。」という理由で「ぼく体」²⁾を選択した。「年下」については「親しみやすく、言葉に感情をのせやすい。」

という理由で「俺体」³⁾が多かった。

ただし、そうは言いながらも生徒が本当に対象者のことをどれだけ思いやって文体を選択したかは定かではない。ただ単に自分の書きやすいものを選んだ可能性も否めない。それぞれの文体の特徴を理解したうえで場にふさわしい選択、そして言葉の効果の確認をねらいとしていたが、もっとしっかりと文体の特徴を意識した根拠をあげさせるべきだった。

そして最後に原文を再読し、「枕草子」における文体の特色を考えさせた。いったん自分の手で書き換えた上で読み直すことによって、生徒は改めて、「一文の短さ」や「体言止め」等の効果について考えることができた。

〈第6次 オリジナル作品を書く。〉

「枕草子」における「ものづくし」一覧表を参考にしながら、オリジナル作品を書かせた。これまでの学習で「ものづくし」においては、生徒の共感を得るものが多く、生徒は「今」に通じる作者の感性を十分に感じ取っていた。以下は生徒の作品と班内での他者評価、この授業を終えての生徒の感想である。

生徒作品2 『幸せなもの』

「幸せなもの」(俺体)

小さくてさ、かわいい赤ちゃんを抱いてさ、にこにこしてる母はさ、とても幸せそうに見えるんだよね。まあ、当たり前だけどね。でさあ、他にも幸せそうなものがあるかなあと考えていたらさ、うちの猫がごはんを食べている姿が浮かんできてね。でさあ、自分的に、笑ってる人はみんな幸せなんじゃないかなあって思ったんだよね。幸せじゃないのにさ、笑うってのはおかしいと思うんだよね。自分が笑ってるときにはさあ、「幸せだなあ」なんてね、思ってる人はいないと思うんだけどね。ほんとはすごい幸せなんだと思うんだよね。ほんとの幸せはさあ、目には見えないけどさ、なにげない毎日の中にたくさんあるものなんだなとかさ、思うんだよね。

【なんか幸せをいっぱいもらったような気がする。】
【ふだん見落としがちに幸せに気づかせてくれるところがすごい。】

生徒の感想2

○私にとって恐ろしいものとは何だろう。そう思い、日常生活を思い出しました。清少納言もこうやって当時、枕草子を書いたのかと思うと不思議な感じがします。

○最後に「ああ…」って思ってもらえるように書いてみようと思ったものの、あまりうまくまとめら

れなかった。

○意外とあっさり書けたんだけど、おもしろさに欠けた気がする。でも、いろいろ考えていく段階は楽しかった。ただ千年後にはこれは共感されないような気がする。

(3) 学習を振り返って

結論として、芭蕉日記の導入と口語訳の書き換え・オリジナル作品作りは、「書くこと」の活動を通して、読みの深化をはかる授業となったと考える。

各題材における「展開」部分、および「結び」部分での活用であったが、これらの活動を複数回行うことで、生徒は各場面で立ち止まり、言葉を吟味することになり、豊かな言葉の獲得および豊かな読みの出発につながる。

しかしながら、その評価のあり方についてはまだまだ課題が残る。一通りの自己評価・他者評価で終わっている。今後の課題としたい。

5. 成果と課題

今回の取り組みは、2 - (2) 研究の方法に示した①～⑤の点に留意した古典学習の実践である。個の考えを深め吟味するために、「書く」活動を継続して行っていくことが、生徒一人ひとりの言葉に向き合い、思考を深めることにつながることを確認された。また、「書く」ことによって、具体的になった多様に表現された言葉や思考を交流し合うことは、そこで更なる発見や気づきがあり、新しい価値の発見につながっていくものである。言い換えると、「書く」ことによって「読み」込まれた思考が、多様に表現され「話」し「聞」き合う力の育成として密接に関係し合っているのである。

さらに、この取り組みでは、生徒一人ひとりの言葉が、他者に対して具体的に発信され、取り上げられることでの自己存在感の高まりも確認された。そして、自らを振り返っていくことで、自己評価が行われることで、生徒自身の変容を自覚させることが明らかになった。

以上のように、「書く」ことによって思考の具体化を図り、他者と交流し合い、自己の変容に気づきながら学習を進めていくことで、主体的な学びとなり、「確かな学力」の育成につながるものと考えられる。今後も、生徒自らの意欲的な「学び」につながる授業づくりの研究を引き続き進めていきたいと考えている。

6. おわりに

附属三原学園では、「確かな学力」の内実を、「基本的な知識・技能」だけでなく、「学ぶ意欲」や「課題発見力」や「問題解決能力」等を含めたものとして捉え、昨年度より、その育成方法に「書く活動」を据えて、実践的に研究を進めてきた。

今年度の研究は、「書くこと」領域を中心とした昨年度の研究を発展させ、「伝統的な言語文化」(古典)を学習材として、「書くこと」と「読むこと」との関連づけに焦点をあてたところに特徴がある。従来の古典指導は、「読むこと」領域において聖典化された古典教材を一方的に受容させることにとどまりがちであったが、今回の授業仮説では、古典も一つの「他者の言葉」として受けとめ、「問題意識」を持って読み深め、自分の考えや生き方を吟味することに生かそうとしたのである。この研究テーマは、学習指導要領の改訂・実施に向けて、「確かな学力」の育成を実現する指導法の開発という点においても、大きな意義を見出すことができよう。

具体的実践に即して言えば、単元「姫の物語? 翁の物語?」(7年)では、第3次「物語作り」と第4次「語り手との対話」において、表現活動と班での意見交換が活発に行われた。単元「今に向かって」(9年)では、第5次「口語訳の書き換え」と第6次「オリジナル作品の創作」において、「書く活動」と「交流・相互評価」が積極的に取り入れられた。これらの言語活動によって、書き手の立場になることを経験し、さらにお互いの作品を読み合うことを通して、原作との対話がいつそう深まっていったのである。

今後は、この活動をどのように評価していくかが課題となる。どういう評定点をつけるかという狭義の評価ではなく、学ぶ意欲の喚起につながる「評価の観点の明確化」および「評価規準の具体化」を明らかにすることが必要となろう。引き続き研究を進めていきたい。

引用(参考)文献

- 1) 田中宏幸, 山元隆春, 實谷富美, 八澤 聡「確かな学力の育成—協同的に学び, 探究する国語科単元づくりに関する研究—」, 広島大学学部・附属協同研究紀要, 第38号, 2010
- 2), 3) Reymond Queneau著, 朝比奈弘治訳, 「文体練習」, 朝日出版社, 1996